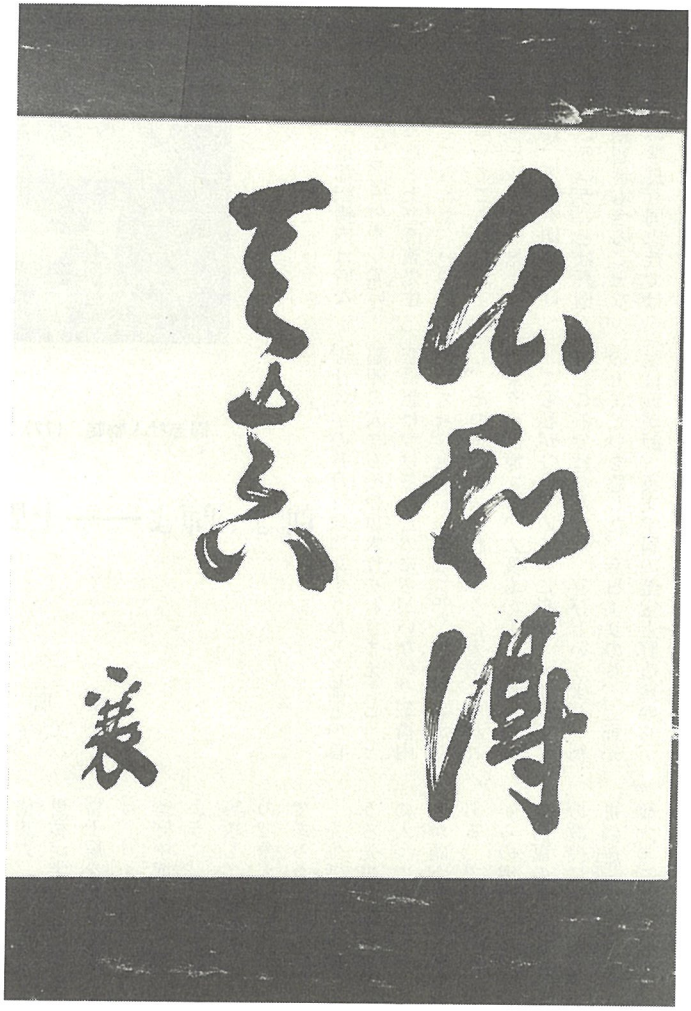
新島襄のこころ―イメージを通して―　(10)

心を和すれば天真を得る

竹中正夫
（大学神学部教授）

新島襄は、「和気満堂」ということばを愛称し、揮毫している。誰しも周囲の人びとと調和して円満に生きることをねがっている。ましてや、同じ志をもって、一つの目的をめざした同志社に属するものたちが一堂に会し、そこに和気が充満していることは、最もねがわしいことである。しかし、実際においては、同志社の歴史をふりかえると、必ずしも、和気満堂の歴史ではなく、対立や抗争が繰り返された痛ましい歴史であった。一八九五年から九九年にかけて、宣教師と対立し、宣教師たちは、総辞職し、「福音学館」という別の学校をつくり、「キリスト教綱領」の削除にともない裁判にまでもちこまれたことがあった。一九一七年から一九年にかけて、学内の二つの派閥の対立、抗争が激化し、原田助、波多野培根などの有力な人材を失うに至った。さらに、一九二八年には有終館出火の責任問題をめぐって、学内の対立が噴出し、同志社中興の主とまでいわれた海老名弾正は辞任し、法学部の基礎をきづいた中島重は、関西学院に移ったことがあった。清濁あわせ飲んで、まあまあと微温的にあればよいというのではない。なすべきことはなし、果すべきことは果されねばならない。しかし、あくまでも、一部を絶対化せず、相互の人格を尊重しながら、心を和して天真を得る姿勢が肝要である。

新島襄は、同志社の創立者であり、内外の人びとから一目も、二目もおかれていたが、必ずしも調和のなかに平穏な日々を送っていなかった。自由を尊重し、個性を大切にする同志社では批判的論議がさかんであり、事あるときは、新島自身にもその鉾先きはむけられていた。新島と学生たち、宣教師たち、そして熊本バンドをはじめとする初期の卒業生たちとの間には、それぞれ異った形であるが軋轢があった。その晩年、「近頃感ずる所アリ而一ノ狂歌ニ吐き出し申候」と書いて、「見ぬふりや聞かぬ振りやら知らぬふり馬鹿のふりして世を渡るかな」とうたっている。肉体的な疲労もあったであろう。外部からの支援を得ねばという願いもあったにちがいない。しかし、彼が一番苦悩したことは、同志社に属する者たちの間の分裂であり、亀裂であった。そんな中で彼は、この書を、自らにいいきかせるように誌したにちがいない。彼がねがったことは、我意を固執して頑固にこだわることではなく、天真を得ることであった。その道は心を和すことによって果されることを彼は表明しており、このことばは、今日の同志社人に深い意味をもっていると思う。



「心和得至真」（心を和すれば天真を得る。）